

国語

時間=70分

(解答: 30 ページ)

「1」 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお設問の都合で本文の段落に 1〜10の番号を付しています。

①「まなぶ」ことは「まねぶ」ことだ。じっさい、このふたつの言葉は語源が同じだ。学ぶことは多くの場合、まねることから始まる。意味もわからずに、ただひたすら師匠の所作をまねる。どの動きが重要で、どの動きが関係ないかもわからずに、ただただ同じ動きをする。それはときに「猿まね」と言われてバカにされる。茶道の先生が茶碗を回すと、生徒は同じように茶碗を回すが、先生がふと手を頭にやると、同じように手を頭にやる。それは思わず吹き出してしまうほど、滑稽でさえある。しかし、²学ぶことは多くの場合、このような滑稽ですらある猿まねから始まらざるをえないのである。

②たしかに猿まねをしないで、所作を習得することが可能な場合もある。ひとつの所作が誰にでも可能ないくつかの要素に分解できるなら、それらの要素を順に実行することで、その所作を行うことができる。「花」という漢字を書くことは、どの画をどの順に書くかを知れば、この字を書くことができるようになる。先生がこの字を書くのを見て、それを猿まねする必要はない。

③しかし、私たちが学ぶ多くの所作は、このような要素への分解を許さない。逆上がり、包丁での皮むき、テニスでのボールの打ち方など、多くの所作は、要素的な動きの組み合わせになっておらず、見よう見まねで学んでいくしかない。もちろん、そのような所作もいくつかの部分的な動きに分けることは可能であるが、これらの部分的な動きはその所作を行うたびに微妙に異なり、まったく同じというわけではない。自転車に乗ることは、サドルにまたがる、ペダルを踏む、左右のバランスをとるなど、いくつかの部分に分けられるが、それらはいつ自転車に乗ってもまったく同じというわけではない。乗るたびに微妙に異なる。同じ要素を組み合わせさえすれば、自転車に乗ることができるようになるというわけではないのである。

④ A 要素に分解できない所作は、全体を猿まねして習得するしかない。それはたいへん ^aコンナンな作業であるが、それをやらざるをえない。学習の第一歩として、とにかく模倣は非常に重要である。動物にも模倣の能力があるが、人間はとくにこの能力に長けている。人はやたらと物まねをしようとする。遊ぶときでさえ、物まねをすることがある。

⑤模倣に関連して、一九九〇年代の初めに、興味深いニューロンが発見された。「ミラーニューロン」だ。それはマカクザルの脳のF5野という部位から、J・リゾラッティらの研究グループが発見したものである(その後、人間の脳にも、サル
のF5野に相当する部位に、このニューロンがあることが確認されている)。ミラーニューロンは、たとえば、サルが食べ物をつかむときに活性化されるだけでなく、実験者がその同じ行動をするのをサルが見たときにも活性化される。これは、実験者が食べ物をつかむのをサルが見たとき、サルは潜在的に(つまり頭のなかで)その同じ行動をすることを意味する。

⑥もちろん、このミラーニューロンは動作の模倣を可能にして、その動作を行う能力を ^bカクタクさせるものではない。サルはみずから食べ物をつかむことができるからこそ、実験者が食べ物をつかむのを見るとき、ミラーニューロンが活性化して、潜在的に食べ物をつかむという動作ができるのである。

⑦したがって、これまで自分でできなかった動作がミラーニューロンによってすぐ模倣できるようになるというわけではない。もしそうであれば、どんな動作もミラーニューロンによって立ちどころに模倣できるようになる。しかし、そう簡単にはいかない。やはり、模倣できるようにするには、何度も試行錯誤を重ね、^cハンパク練習をせざるをえない。

⑧それでも、ミラーニューロンは模倣ができるようになるのに、³一役買っているかもしれないと考えられよう。サルが自分ではまだ食べ物をつかむことができないときでも、実験者が食べ物をつかむのを見れば、ミラーニューロンが活性化して、それによって潜在的に食べ物をつかもうとするだろう。もちろん、すぐにはその行動を模倣できないが、それでもとにかくそうしようと試みる。しかも、この場合は、^B潜在的に食べ物をつかもうとするだけではなく、むしろ顕在的に、つまりじっさいに手を動かして食べ物をつかもうとするだろう。ミラーニューロンの活性化はこのような顕在的な試行錯誤の学習を引き起こし、この学習をへて、サルはやがてその行動を模倣できるようになる。ミラーニューロンはこのように模倣の学習を促すという重要な役割を担っているかもしれないのである。

⑨話を戻すと、きちんとまねができるようになるには、とにかく試行錯誤を重ねるしかない。しかし、やみくもに試行錯誤を重ねるだけでは、まねの習得ですらおぼつかない。師匠の技を見てそのまねをしようとするとき、それがうまくいったかどうかもわからずに、ただまねつばいことを繰り返すだけでは、おそらくまねの習得は不可能であろう。⁴まねができるようになるには、試しにやってみることがうまくいったかどうかかわらなければならない。それがわかれば、うまくいったときのまねは (X) され、そうでないまねは (Y) されて、やがてきちんとまねができるようになる。

⑩ C 試しにやってみたまねがうまくいったかどうかは、どのようにしてわかるのだろうか。じっさいにまねをしてみたとき、うまくいけば、何となく快い感じがし、そうでないときは、ぎこちなく不快な感じがすることがある。このように快/不快が生じる場合は、それが良し悪しを示す信号になる。この信号にもとづいて、快く感じるまねは (X) され、不快に感じるまねは (Y) される。

(信原幸弘『覚える』と『わかる』による。一部改変)

問1 波線部 a～d のカタカナの部分を、漢字で記しなさい。

問2 空欄 A・B・C に入る最も適当なものを、次の各群ア～オのうちから、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|---------|-------|-------|--------|---------|
| A | ア このように | イ 例えば | ウ しかし | エ ところで | オ もし |
| B | ア ひとえに | イ 次第に | ウ 徐々に | エ たんに | オ 急に |
| C | ア ところが | イ そこで | ウ では | エ あるいは | オ このように |

問3 波線部①「猿まね」と言われてバカにされるのはなぜですか。その理由を、本文中の語句を用いて、二十五字以内で答えなさい。ただし、句読点を含みます。

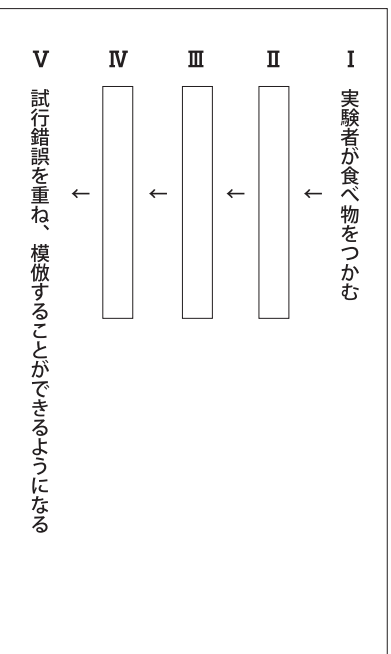
問4 波線部②「学ぶことは多くの場合、このような滑稽ですらある猿まねから始まらざるをえない」について、次の問いに答えなさい。

(1) その理由を、本文中の語句を用いて、三十字以内で答えなさい。ただし、句読点を含みます。

(2) これにあてはまらない例を、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 包丁での皮むき
- イ テニスでのボールの打ち方
- ウ 逆上がり
- エ 自転車に乗ること
- オ 「花」という字を書くこと

問5 次の表は、段落⑤～⑧に記されたサルの実験による模倣の学習の流れを示したものです。表中Ⅱ～Ⅳの に入る最も適当なものを、次のア～オのうちから、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。



- ア 快い感じがする模倣を続ける
- イ 顕在的に模倣を試みる
- ウ 潜在的に同じ行動をする
- エ やみくもに試行錯誤を重ねる
- オ まねっばいことを繰り返す

問6 波線部③「一役買って」について、「一役買う」の意味として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 役目から仕方なくある事柄に加わること
- イ 興味を持ってそのことに深入りすること
- ウ 自分の果たすべき役割が与えられること
- エ 自ら進んで役割や任務を受け持つこと
- オ 陰ながら後押しをして、援助すること

問7 傍線部④「まねができるようになるには、試しにやってみたことがうまくいったかどうかをわからなければならぬ」とありますが、うまくいったことがわかるのはどのような場合ですか。本文中の語句を用いて答えなさい。

問8 空欄（X）・（Y）に入る組み合わせとして最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア（X）称賛・（Y）叱責
- イ（X）強化・（Y）抑制
- ウ（X）変更・（Y）修正
- エ（X）学習・（Y）指摘
- オ（X）評価・（Y）注意

「二」 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

東京奥多摩の霊峰御嶽山に、太古から神々を祀ってきた三十余の神官（御師）の屋敷があり、その一つが「私」の母の実家であった。昭和三十年代、小学一、二年の「私」は、たくさんのいとこやはとこ一夏を過ごしていた。その中、「私」は屋敷内で「すぎきかしこ」と名乗る少年と出会う。男の子たちが肝だめしをすることになり、他の子どもたちのいじわるから、「私」は一人で東尾根の奥津城（墓所）に行くはめになった。真っ暗闇が怖ろしく、立ちすくんでいると、かしこが後を追ってきてくれ、ほっとした「私」は、べそをかいてしまふ。

かしこは私から提灯の柄をやさしくウバうと、かわりに手をつないで歩き出した。尾根道には木立がなく、藍色の夜空がいつぱんに溢れた。月は雲居に隠れていたが、そのぶん星が溢れて、溝々と流れる天の河がそのまま地平に鑿められた東京の灯に傾れ落ちていた。歩きながらかしこは、つないだ手を振って拍子を取り、古い軍歌を唄った。

- 四百余州を挙る 十万余騎の敵
- 国難ここに見る 弘安四年夏の頃
- 何ぞ恐れんわれに 鎌倉男兒あり
- 正義武断の名 一喝して世に示す

私たちの世代には、まだ生活の中に軍歌が生きてはいたが、いかにも古臭いそんな歌は聞いたためしもなかった。「元氣が出るんだ。教えてあげるから」一緒に唄おうよ」

運動会の行進曲に、むりやり難しい言葉をツめこんだような奇妙な歌だった。だが、かしこの後について一小節ずつ唄うと、意味はわからなくとも肚の底から勇氣が湧いてくるような氣がした。

「学校で教わったの？」

「そうじゃないよ。おじいさんが教えて下すったんだ」

「かしこちゃんのおじいさんは、兵隊さんだったんだね」

「ちがうよ。神主さ」

「あれ、それじゃあ僕と同じだ」

私は歩きながら夜道を振り返った。杉木立に被われた御師の家々が、山頂の神社に服うように灯をともしていた。

かしこはこの屋敷の子供なのだろう。三十余家の神官の中に、鈴木を姓を持つ家がほかにあるのだろうか。

そのとき私は、ひとつの矛盾に氣付いたのだった。

御師の家はそれぞれが雅びな屋号を持っていた。しかし私の家だけが、それを持たずに「鈴木」という姓で呼ばれていた。

太古から御嶽山に住まう神官の家には同姓が多いから屋号を必要とするが、江戸時代の初めに定住した「鈴木」の姓は一軒きりだからである。

伯父に聞かされていたそんな話をたどれば、かしこは嘘をついていることになる。

とまどう私の手をつんと引いて、かしこは奥津城への道を急いだ。「この歌は軍歌じゃないんだよ。昔むかし、蒙古の大軍が日本に攻めてきたとき、お待さんたちが迎え撃ったんだ。それで、負け戦になりそうだったんだけど、神風が吹いて敵の船をみんな沈めちゃったんだよ」

その話は聞いたことがある。小学校の先生はひとくさり語りおえたあとで、「神風なんかじゃなくて、たまたま台風がきたんだ」と種明かしをし、子供らをつかりさせたものだった。

「やつぱり学校で教わったんだね」

「そうじゃないって。おじいさんが教えて下さったんだよ」

かしこに同じことを二度言われて、その「おじいさん」がいったい誰なのかはわかった。考えたわけではなく、それしかない答えがふいに降り落ちてきたのだった。

まるで行手の闇に投写された幻灯のように、^(注)見もせぬ時代の点景が私の胸に映し出された。

表廊下の陽だまりで、^I白髯を蓄えた老人が幼い孫の手を取って勇ましい歌を教えている。聡明な少年は意味もわからぬ

まま、難しい歌詞を丸呑みに覚えてゆく。その坊主頭を撫でながら老人は相好を崩して言う。「かしこみかしこみのかしこじゃあなくって、おまえはかしこいかしこだな」と。

X

しかし、次の点景が闇に映し出されたとき、私は胸苦しくなつて、かしこの手を強く握りしめた。

風^(注)に吹き晒された尾根道を、葬列がしめやかに進んでゆく。幣帛が風にちぎれて舞い、頂に榊の枝を立てた幡が翻る。

小さな新木の棺は神官たちが担いでいるが、それはいかにもかるがるとしている。そのすぐ後から、^{II}験力こそ持たぬが心やさしい祖父が、かたときでもそうしていたのであるうか、祓詞のかわりに人の泣声を上げ、純白の衣にくるんだわが子の亡骸をかき抱いて歩んでゆく。

やがて私とかしこは、まぼろしの葬列の後を追うように、星明りの奥津城に足を踏み入れた。

「もう少しだよ。腰抜けにされたんじやかなわない」

かしこは唄いながら、私を励ましてくれた。いつしか悲しみが胸に満ちて、怖じる心は消えてしまつていた。鈴木^(注)の墓所は奥津城の東の端に、長細く整然と鎮まっていた。雲居から放たれた月が、あたりの闇を押しやった。夥しい数の墓石は御嶽山の歴史を映して、武張った石塔であったり、苔むした野仏であったりした。片仮名のコの字に組まれた墓所の中央には、ひととき立派な曾祖父夫妻の墓石が建ち、その隣にいくらか謙った、まだ新しい祖父父母の墓があった。

私はここまでたどりついた証拠の割箸を、祖父の墓石にソナえた。

「いでや、すすみてちゆうぎに、きたえしわがかいな、ここぞくのために——」

幼い伯父は私のために唄い続けていた。それはいつまでも聴いていたほど清らかな歌声だったが、溢れる悲しみがまさつて私は言った。

「わかつたから、もういいよ。僕は腰抜けじゃないから。もう二度と怖がつたりしないから」

私はつないだ手をほだいて、提灯を取り返し、神前にぬかづくように深く頭を下げて、「ありがとう」と付け加えた。

祖父の墓石のかたわらには、初夏に白い花を咲かせるつつじの古木があった。茂るにまかせて地を躡う枝に隠された、丸く小さな岩に私は目を留めた。

枝を手折って指先で探ると、すりへって確かにはたどれぬが、たぶん「かしこ」とだけ彫られた仮名文字が触れた。ほかには何ひとつ、享年も没年もなかった。

ふるさとの巖とつつじを標として、小さな棺はそこに埋められたのであろう。墓石のつややかな丸みは、風雪に磨かれたのではなく、長命を得た祖父が愛おしみ慈しみ続けた証のように思われた。

立ち上がってカエリみると、かしこの姿はどこにも見当たらなかった。神上った父祖の気配をそちこちを感じたが、語りかけてくる魂はなかった。

見上げれば星々は天に満ちて、それらのひとつひとつが、私の命にづらなっているように思えた。それから私はどうしたのだろう。恐怖がぶり返して夜道を駆け戻ったのか、あれこれ物思いながら帰ったのか、やはり記憶にはない。

(浅田次郎「見知らぬ少年」による。一部改変)

- 2 服ろう ―― 服従する。まつらう。
- 3 屋号 ―― 個々の家屋敷の通称。呼び名。
- 4 幻灯 ―― スライド。ガラスやフィルムに描いた画像をスクリーンに映して見せる写し絵。映画以前に流行した。
- 5 幣帛、幡 ―― 幣帛は、紙や布を切つて木にはさんでたらした御幣。幡は供養のための長旗。
- 6 験力 ―― 修験者が修行して得た力。
- 7 祓詞 ―― 神に祈つて、罪・けがれ・災いなどを除き払うために、神官が読むことば。
- 8 蹲う ―― うずくまる。しゃがむ。
- 9 享年 ―― この世に存在した年数。年齢。没年も同じ。
- 10 神上つた ―― 神が天にお上りになった。昇天された。転じて、貴人が亡くなった意。

問1 傍線部 a、d のカタカナの部分、漢字で記しなさい。

問2 波線部 ①・②は、それぞれどのような意味ですか。次の各群ア～エのうちから、最も適當なものを一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 相好を崩して
- | | |
|---|--------------|
| ア | 愛嬌のある愉快的表情で |
| イ | 心からうれしそうな表情で |
| ウ | いかにもふざけた表情で |
| エ | わざとしかめた表情で |
- ② 武張った
- | | |
|---|--------------|
| ア | いかにも武士が好みそうな |
| イ | 周囲にしめ縄を張った |
| ウ | いかめしくごつごつした |
| エ | とくに硬い石で作った |

問3 傍線部 A「ひとつの矛盾」とは、どのようなことですか。それを表す最も適當なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 御師の家ではたいい屋号を名乗るのがふつうなのに、かしこが屋号ではなく、姓の方を名乗ったこと
- イ 古い軍歌を教えるようなかしこのおじいさんが、兵隊ではなく、自分の場合と同じ神主であったこと
- ウ 御師の家の中では、私の家は一軒きりの「鈴木」姓であるのに、かしこも「すぎき」と名乗ったこと
- エ ほかの子どもとは違ってやさしいと思っていたかしこが、私に嘘をつくような子どもであったこと
- オ 御師の家は雅びな屋号を持っているのに、私の家だけが、しごくありふれた姓で呼ばれていること

問4 傍線部 B「太古から御嶽山に住まう神官の家」について、本文中から、そのたまたまを表している一文を抜き出し、始めの三字を記しなさい。

- 問5 の部分には、二つの「点景」が描かれています。これらの点景について、次の問いに答えなさい。
- (1) 傍線部C「見もせぬ時代の点景」について、「見もせぬ」、つまり見たこともないと言っているのは、なぜですか。十五字以内で簡潔に述べなさい。
- (2) 傍線部D「次の点景」には何が描かれていますか。それを簡潔に表現している箇所を、本文中から七字で抜き出さなさい。
- (3) 二つの点景に描かれたⅠ「白髯を蓄えた老人」、Ⅱ「験力こそ持たぬが心やさしい祖父」とは、それぞれだれですか。二人の、「私」から見た関係を、漢字で記しなさい。
- (4) 二重傍線部A「幼い孫」・Ⅰ「わが子」はだれか記しなさい。

問6 傍線部Eについて、「腰抜けにされたんじやかなわない」とはどのようなことですか。それを表す最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 肝だめしでこうしてがんばっているのに、墓所まで行けず、「私」と一緒に自分が腰抜け扱いされるのは心外だ。
 イ 肝だめしでこうして一人でがんばっているのに、墓所まで行けず、「私」が腰抜け扱いされてしまうのは心外だ。
 ウ 肝だめしでこうしてがんばっているけれど、恐怖のあまり「私」が本当の腰抜けになってしまったらいいんだ。
 エ 肝だめしでこうしてがんばっても、いったん腰抜け扱いされたら、今後だれにもかなわなくなってしまう。

問7 傍線部Fについて、「私」は何に「溢れる悲しみ」を感じているのですか。「Y」が「Z」こと「かたち」で答えなさい。Yには人名が入ります。

問8 傍線部Gについて、「神前にぬかづくように深く頭を下げ」たのはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「幼い伯父」の清らかな歌声に深く感動して
 イ 平常心でいることを、ことさらに示そうとして
 ウ 作法に従っていいねいに振る舞おうとして
 エ 「幼い伯父」の深い愛情に心から感謝して

問9 傍線部Hについて、「墓石のつややかな丸み」は、具体的にはどのようにしてできたと「思われた」のですか。簡潔に記しなさい。

問10 作者浅田次郎は、御嶽山をめぐる物語について、作品のモチーフとなった出来事は、すべて本当にあったことだと述べています。つまり、この本文は浅田の自伝的な作品と言えます。次のア～クの中から、同様にそれぞれの作者の自伝的作品であるものを二つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|-------|--------|-----------|--------|-------|
| ア 金閣寺 | イ キッチン | ウ 暗夜行路 | エ 山椒大夫 | オ 地獄変 |
| カ 細雪 | キ 人間失格 | ク ノルウエーの森 | | |

「三」 次の文章は、元弘の変によって隠岐への流刑に処せられた後醍醐天皇の様子を描いた一節です。これを読んで後の問いに答えなさい。

かの島には、春来てもなほ浦風さえて浪荒く、渚の水もとけがたき世の気色に、いとと思しむすばる事つきせず。かすかに心細き御住ひに、年さへ隔たりぬるよ、とあさましく思さる。さぶらふ人々も、しばしこそあれ、いみじく屈じにたり。今年(注1)は正慶二年といふ。閏二月あり。後の如月の初めつかたより、とりわきて密教の秘法を試みさせ給へば、夜も大殿籠らぬ日数へて、さすがいたう困じ給ひにけり。心ならずまどろませ給へる暁がた、夢現とも分かぬ程に、後宇多院ありしなから(注2)の御面影さやかに見え給ひて、聞え知らせ給ふ事多かりけり。うちおどろきて夢なりけり、と思す程、いはんかたなく名残かなし。御涙もせきあへず、「さめぎらましを」と思すもかひなし。

源氏の大将、須磨の浦にて父御門見奉りけん夢の心地し給ふも、いとあはれに頼もしう、いよいよ御心強さまさきて、かの新発意が御迎へのやうなる釣舟も、便り出で来なんや、と待たるる心地し給ふに、大塔の宮よりも、あま人の便りにつけて聞え給ふ事絶えず。

〔増鏡〕による。一部改変

(注) 1 正慶二年——一三三三年。閏年で、二月の後に閏二月があった。

2 密教の秘法——真言密教などで行う秘密の祈祷。ここでは討幕の祈祷。

3 後宇多院——鎌倉時代後期の第九十一代後宇多天皇。後醍醐天皇の父。一三三四年没。

4 「さめぎらましを」——「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめぎらましを」〔古今和歌集〕巻二、恋二、小野小町〕による。

5 源氏の大将——『源氏物語』の主人公、光源氏。

6 新発意——『源氏物語』「明石」の巻に登場する明石入道。

7 大塔の宮——天台座主となった皇族の称号。ここでは、後醍醐天皇の第一皇子、護良親王をいう。

問1 傍線部①「如月」の読みとして、最も適当なものを、次のア～シのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|-----|---|--------------|
| ア | みなつき | イ | やよい | ウ | ながつき | エ | うづき | オ | かんなつき(かみなつき) |
| カ | むつき | キ | はづき | ク | さつき | ケ | しわす | コ | ふづき(ふみつき) |
| サ | しもつき | シ | きさらぎ | | | | | | |

問2 傍線部②・③・④の解釈として、最も適当なものを、次の各群ア～エのうちから、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

② 大殿籠らぬ日数へて

- | | |
|---|------------------|
| ア | 帝位におつきになつて日数が過ぎて |
| イ | 後宮を訪問なされて数日が過ぎて |
| ウ | 祈祷をなさらないで数日が過ぎて |
| エ | お休みにならない日数が過ぎて |

③ ありしなからの御面影さやかに

- | | |
|---|-------------------|
| ア | 病でおやつれになつたお顔が弱弱しく |
| イ | 亡き御霊が陰影も薄くぼんやりと |
| ウ | 生前のままのご様子ではつきりと |
| エ | 若き日の御姿のようにさつそうと |

④ さめざらましを

ア 夢で会えるのなら、もう一度眠ってでも会いたい
イ もし夢だと知っていたら、目覚めなかったのに
ウ 強く願ったから、目覚めずに会えたのだろうか
エ 夢だとわかって、目覚めないよう願ったのだが

問3

二重傍線部A「まどろませ給へる」・B「聞え知らせ給ふ」は、それぞれ、誰の行為ですか。最も適当な人物を、次の

アく力のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 後醍醐天皇 イ さぶらふ人々 ウ 後宇多院 エ 大塔の宮 オ 源氏の大將 カ 新発意

問4

傍線部a・bの「に」の文法的な説明として、最も適当なものを、次のアくオのうちから、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 格助詞 イ 接続助詞 ウ 断定の助動詞 エ 完了の助動詞 オ 形容動詞の活用語尾

問5

波線部X「さすがにいたう困じ給ひにけり」を、口語訳しなさい。

問6

次の文章を読んで、(1)・(2)に当てはまる人物として、最も適当なものを、後のアくエのうちから、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

本文Vの部分、「都から須磨に退去していた光源氏が、夢に現れた父故桐壺院から、住吉の神の導きのままにこの浦を去れ、と告げられた後、明石の入道の舟に助けられ、ついには、京へ帰ることができた」というエピソードを踏まえている。『増鏡』では、(1) ()を「源氏の大將(光源氏)」に、同じく(2) ()を故桐壺院に、それぞれ重ね合わせた表現がなされている。

ア 後醍醐天皇 イ さぶらふ人々 ウ 後宇多院 エ 大塔の宮

問7

本文の説明として、内容に合致しないものを、次のアくカのうちから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 島での後醍醐天皇は、世の中から隔てられて心が晴れないことが多かった。
イ 後醍醐天皇は、夢の中で父のことを聞けなかったことをとても後悔した。
ウ 後醍醐天皇は、自分の見た夢を、光源氏の見た夢のようだと受け止めた。
エ 後醍醐天皇は、父の夢を見た後、流刑になった罪を悔いて仏道修行に励んだ。
オ 源氏物語の明石入道の釣舟を、後醍醐天皇を救うものたえとして表現している。
カ 後醍醐天皇は、救い出される機会が訪れることを期待する気持ちになった。

問8

『増鏡』は、南北朝時代に書かれた歴史物語です。『増鏡』以前に、すでに成立していた歴史物語作品を、次のアくコのうちから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 栄花物語 イ 梁塵秘抄 ウ 今昔物語集 エ 徒然草 オ 大鏡
カ 日本永代蔵 キ 雨月物語 ク 平家物語 ケ 十訓抄 コ 枕草子